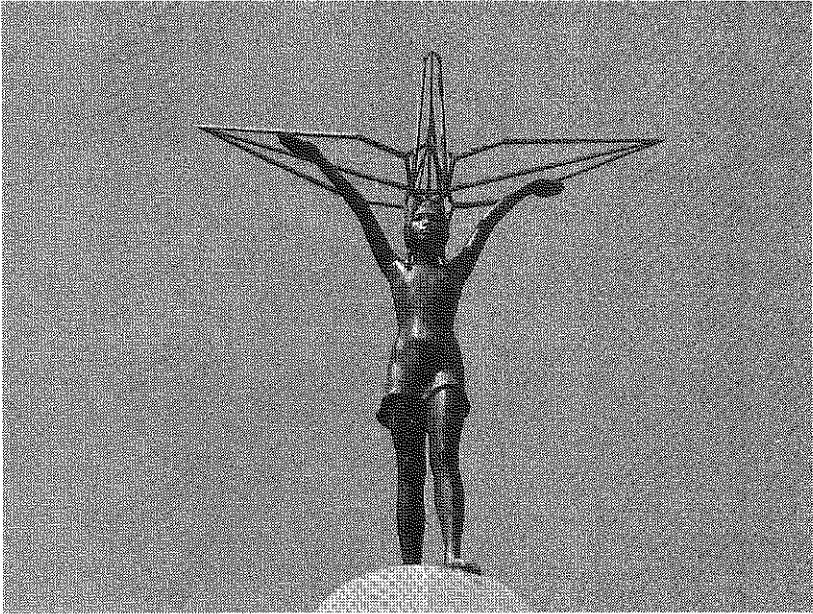


倉掛のぞみ園

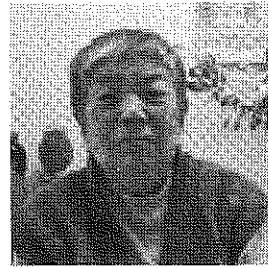
特 別 養 護



原爆の子の像

大切な人を喪^{うしな}つて

栗谷 ミツ子（八十五歳）



被爆地……宝町（爆心地より一・三km）

当時の急性症状……足の裏に釘が刺さり、全身に激痛

家族の死亡……夫

現在の病状……白内障・脳梗塞後遺症・高血圧

被爆時の状況及びその後の生活

当時、私は二十五歳、主人は二十八歳で宝町に住んでいました。結婚して三ヶ月ぐらいの時、主人は呉^{くま}の万年筆の会社に勤めており出張が多く、実際に生活したのは二ヶ月にもならなかったと思います。

その日の八月六日、主人は建物疎開^{そかい}で袋町に行っており、私は玄関で掃除をしていました。「ピカッ」と光ったと同時に気を失ってしまい、気がつくくと家の下敷きになっていました。何とか抜け出すと、足の裏から表にかけて五寸釘が刺さっていました。全身の痛みの中で大河小学校まで布団をかぶり無我夢中で逃げました。途中、比治山橋^{ひじやまばし}の上で女生徒の「先生痛いよう、痛いよう」

と言う声が聞こえましたが、周りを見る余裕もなく逃げました。

学校に避難して三日目に両親が助けに来てくれました。私は主人が気がかりで、今すぐにも捜しに行きたかったのですが、動けなかった。ので両親に袋町まで捜しに行ってもらいました。結局、遺体も見つけだすことが出来ませんでした。

その後、私は実家の上根で療養を兼ねて生活していたのですが、昔の同僚の薦めもあって段原の扇屋に勤めました。

縁あって三十三歳で、再婚しました。主人には、二人の子供がおりましたが、とても優しい人で何不自由なく生活していました。八十二歳で主人が亡くなってから、私も七十五歳で脳梗塞を患い、その後は二人の子供に助けられながら、入退院を繰り返す状態が続いていました。

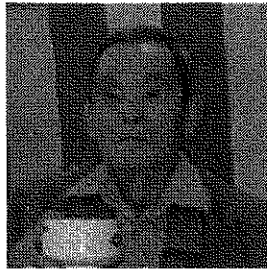


南千田町付近 南千田町一帯の民家の倒壊（菊池俊吉氏撮影）

平成十三年に、のぞみ園に入園することができ、のぞみ園では心穏やかに生活しております。
私はこの戦争を通して多くの方を喪うしなってきました。戦争とは本当にむごいものでいけないもの
だと思っております。世界が平和である事が一番だと思います。

戦争があたえた人生の残酷な日々

岩 本 巖 (七十九歳)



被 爆 地……………仁保町大河(爆心地より四km)

当時の急性症状……………全身倦怠感

家族の死亡……………なし

現在の病状……………脳出血後遺症・狭心症・糖尿病・高血圧

被爆時の状況及びその後の生活

八月六日当時、両親、弟、妹は本郷ほんじょうの実家におりました。姉三人はすでに嫁いでいました。兄は徴兵で川西市に行っていたので家族全員、無事でした。

私は軍隊の船舶兵でした。兵舎が宇品の広陵中学校内にあり、校舎で寝泊りしていました。当日の朝、仁保町に船舶部隊の偉い人が来られると言う事で、仁保町に行っていました。その時、空襲警報が鳴ったので防空壕に逃げました。その後、兵舎に帰り、小さな診療所のような所にいた時、再び空襲警報が鳴り、「ドッカーン」とものすごい音がして校舎が大きく揺れました。「伏せ！動くな！」と叫ぶ声が聞こえ、しばらくじっとしていた後、防空壕に隠れました。その後、兵舎に帰って見ると、校舎は大きく傾いていました。

それから元気な者は比治山下に召集され、沢山の死んだ人を爆心地あたりから陸回りで集めて、油をかけて焼くという仕事を十日間くらい一生懸命しました。

その後、山口県の串浜連隊に帰り、軍隊が解



地元の幼稚園児の慰問

散し、実家のある本郷に帰りましたが、どうも体調が優れないため、三原の日赤病院に三ヶ月くらい入院しました。

その後、少しずつ体調も快復してきたので、自転車で三原方面での乾物等の行商をしました。二十六歳の時、婿養子に行きました。呉の進駐軍で働いたり、九州の炭鉱で働いたり、職を転々としましたが、知人の勧めで三原の三菱造船所に入社し電車の組立工をしました。

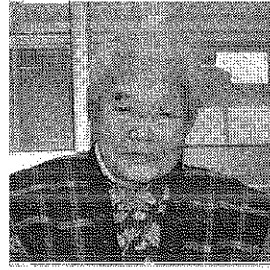
五十歳を過ぎた頃、病気で倒れ、三菱病院に入院し、入院中に定年退職となり、三原の日赤病院に転院しました。その後ずっと病気がちで、六十歳頃に脳内出血で倒れ、左半身麻痺となり、病院生活を余儀なくすることとなりました。

平成四年七月に倉掛のぞみ園に入園し、皆さんに良くして貰っており、満足です。娘は大阪に住んでいます。年に一度くらいは孫を連れて来てくれます。孫の顔を見るのが楽しみで嬉しいです。

原爆の事を時には思い出しますが、あんな怖い事は二度とあってはいけないと思う。原爆はいらん！

「ピカーツ」と光って、「ドーン」と大きな音がして

後河内 キクヨ（九十六歳）



被爆地……江波町（爆心地より三・五km）

当時の急性症状……なし

家族の死亡……なし

現在の病状……高血圧・糖尿病

被爆時の状況及びその後の生活

江波は夏祭りじゃった。前の晩からの空襲警報が朝、解除された。そうしたら弟の嫁が「姉さん、祭りじゃけん、寿司つくろうや」と言って蒔の皮をむき出し、私も支度を始めた。そうしたら、また、空襲じゃ。どこを飛んでいるじゃろうかと外に出たんよ。北の空を見て、南を見て、東を見て、西を見た瞬間、「ピカーツ」と光って、「ドーン」と大きな音がして、火の玉みたいなものが見え、そうしたらガスが一面にかかり、見えんようになって、ひとつもわからん様になったよ。どこの子か「母ちゃん、母ちゃん」と泣き出しても行ってやる事が出来んかったのう。しばらくして明るくなった。

近所の人たちと「大丈夫じゃったか」とか「おそろしかつたのう」と口々に云い合おうた。裏のお寺の石段に腰掛けて唸るうめき声ばかりじゃった。見るに堪えず、悲惨で気の毒じゃった。かわいそうな男の子もおった。肩から焼けただれて、親や家を捜しておった。

当時、一緒に住んでおったのは、私と子供二人、弟の嫁と子供四人で、うちには防空壕を掘っておったので、そこに入り、子供達は無事じゃった。家に入って家族が無事で、ホッとした。

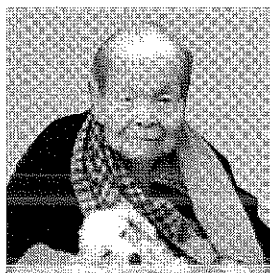
私は町の組長をしておって、みなさんのお世話をしたり、タバコや酒等を配給毎に分けて配っておった。配給のお陰で食べるものには恵まれ、うちかたは（自分の家は）弟が漁師じゃったこともあって、田舎に行つて、魚と米を交換したりできた。

私はピカの時、外におつたんじゃが、けがもせず、毒も吸わず無事で、その後も元氣じゃ。キンさん、ギンさんみたいに長生きさせてもらうて、皆さんのお陰よのう。

原爆は怖かつたし、思い出しとうもない。戦争は二度としてもらいとうない。

観音様のおかげ

宇治川 スミコ（九十四歳）



被爆地……………仁保町堀川町（爆心地より四・一km）
当時の急性症状……………なし
家族の死亡……………なし
現在の病状……………白内障

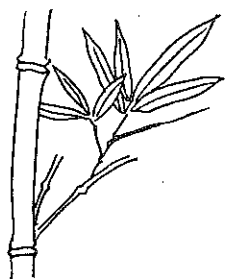
被爆時の状況及びその後の生活

八月六日の朝、いつものように家族で朝食を済ませた後、主人は仁保町にある製作所に勤めに出かけて行きました。長女が学校へ行く前で、私は、赤ん坊の次男を抱いて、玄関を出た時でした。一瞬、「ピカーッ」と眩しい光が差したため、慌てて子供たちを抱いたまま、夢中で家の中を走り込み、布団を頭からかぶりました。気が付いた時、家の窓ガラスが壊れ、畳一面に飛び散っていました。お陰で、子供三人と私は怪我も無く、家も破壊せず助かりました。しばらくして、そと外に出てみました。山の陰になっており、爆心地からはなれていたためか、近所の家も壊れた所はなかったです。

近所の学校には、広島の方から怪我をした人達が避難し、「水を下さい、水を下さい」と叫ぶ声
がしていました。勤めに出ていた主人が、家族を心配して、飛んで家に帰ってきてくれました。主
人も怪我も無く、家族全員が無事だった事がうれしく、若い頃から観音様を拜んでいたおかげと、
みんなで感謝しました。それから主人が田舎に買出しに行き、米を工面してきてくれ、何とか
生活していました。その主人も三十五年前に突然、心臓麻痺で亡くなってしまいました。

その後、私は和裁をしながら生計を立て、子供三人をなんとか大きくしてきました。九十四歳
になる今も、元気でおられるのは観音様のお陰です。

あの時の怖かった事は忘れられません。戦争が一番怖いのです。戦争は二度としてはいけません。



命の大切さ



角 家 安 代（七十九歳）

被 爆 地……………西観音町（爆心地より一・三km）

当時の急性症状……………ガラス傷

家族の死亡……………父親

現在の病状……………小脳出血・多発性脳梗塞・糖尿病

被爆時の状況及びその後の生活

当時、私の家族は西観音町に住んでいました。父は、広瀬町で仕出屋を営んでおり、私は電話の交換手の仕事をしていました。空襲警報が鳴ると隠れなければならぬ日々でした。物が無い時でしたが、父が着物を食べ物と交換して、不自由なく食べさせてくれました。

被爆時、私は母と下の弟と三人で自宅に居りました。大きな爆発音がして、「爆弾が落ちた、外に出んさい」と母親が叫びました。弟を連れて外に出ると、あたりは一面焼け野原でした。それはもう悲惨としかいえないようがありません。その時見た馬の姿を、未だに忘れる事ができません。横たわっている馬の皮は剥げ、苦しんで鳴っていたのです。動物には何の罪も無いのに、と思いま

した。被爆直後、弟の皮膚は火傷で溶け、手からワカメをさげているような状態でした。私と母は、身体にガラスが刺さりましたが、軽傷で済みました。重い身体を引きずって、私たちはやっとの思いで地御前まで逃げました。その日父親は、朝から仕事に出たきり帰ってきませんでした。捜し続けましたが、とうとう遺体も見つかりませんでした。上の弟は、学徒動員先の三菱造船所で被爆しましたが、無事でした。

その後、母と弟と共に九州の叔母の所へ疎開し、三年間お世話になりました。叔母の家はお寺で、手伝いをさせてもらいながら暮らしていました。広島に帰る時には、「帰っても物がなから困るだろう」と、たくさんの生活用品を持たせてくれました。本当に感謝しています。帰ってからは、家族で力を合わせ、バラックを建てて生活するところから始めました。交換手



「8・6原爆の日」の慰問風景

の仕事も再開し、翌年、私たちの仕事の面倒をよく見てくれた夫と結婚しました。三人の子供も授かりました。夫は材木業の仕事をしておりましたが、体調を崩し、入退院を繰り返すようになりました。夫は平成八年から約五年間、倉掛のぞみ園でお世話になりました。そして私も現在、のぞみ園で楽しく生活しております。

原爆を体験し、命の大切さについて考えさせられました。大切な命を奪う戦争をしてはいけません。自分の代で終わればいいとおもっています。

ほんの数秒で変わりはてた景色や人々の姿……

北 喜里恵（七十八歳）

被 爆 地……千田町（元）（爆心地より二km）

当時の急性症状……なし

家族の死亡……なし

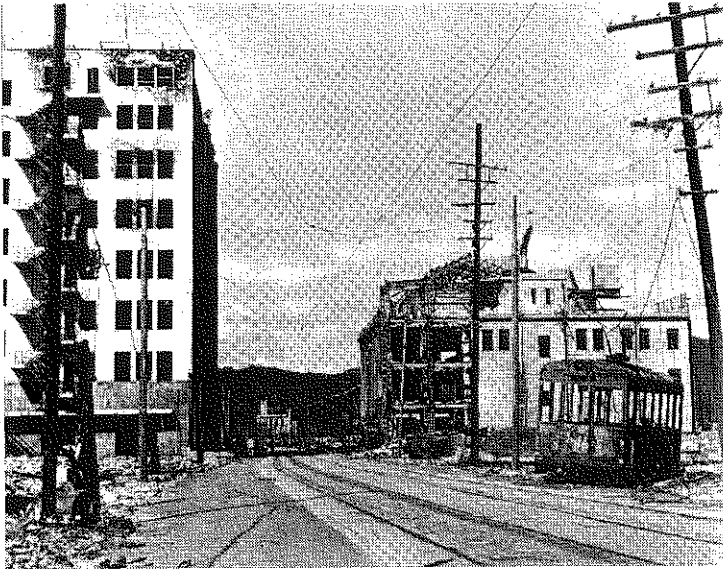
現在の病状……脳梗塞後遺症・気管支喘息・糖尿病・心不全



被爆時の状況及びその後の生活

被爆当時、豊島で育った私は、同じ郷里の友人たちと共に、広島へ仕事をする為に来ていました。倉庫や港湾で、砂糖やしょうゆなどの荷下ろしをしていました。男の人達に混じっての力仕事は、女の私には重労働でした。住居は、宇品うしなにあり、友人たちと同居していました。当時の豊島からは、私たちのように仕事をする為、広島に来ていた人が多くいました。

被爆当日、いつものように友人二名とトラックに乗って、荷下ろし場に向かっています。宇品を出発し、千田橋を渡り、日赤病院の前に差し掛かったとき、あつという間に目の前が見えなくなりました。そのとき何を見ただかは覚えていません。ただ、ほんの数秒で目の前の景色が変わってしまったのです。友



八丁堀電車通り 福屋百貨店付近（爆心から約850メートル）の八丁堀電車通り。この写真は、爆風で軌道内で脱線した電車を後日、道路わきに移動させたあと撮影されたものである。（林 重男氏撮影）

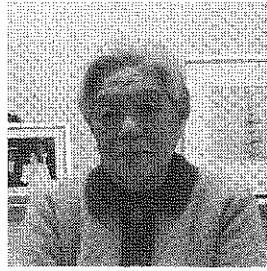
人たちと、ただ、ただ、トラックの中において時間が過ぎていきました。冷静になったときには瓦礫の山を見て、「ああ、前に進めない」と思い、そのまま宇品に引き返したのです。家に着いたとき愕然としました。今朝まで住んでいた家は、爆風でゆがんでいました。何時崩れてもおかしくないような家に二日間居て、豊島に帰りました。帰省して十八日後、復旧作業のため再び広島に来ました。広い焼け野原で、復旧作業をし、火傷を負った人たちを似島へ船で送りました。当時の広島には、多くの火傷患者がいましたが、収容する病院はもちろん、雨風を防ぐ場所すらなかったのです。軽症の人もいれば、誰かわからなくなったような人もいました。ゆがんだ顔の人……化粧しても隠せないんですよ。私たちも生きるのに必死でした。

その年の暮れに再び豊島に帰り、夫と結婚しました。夫も豊島の人で、原爆投下翌日に出兵先から帰り、入市で被爆しました。当時の豊島は、広島で仕事して被爆した人たちがたくさんいました。そのため、田舎でしたが、被爆者差別はなかったのです。その後は、夫は漁師となり、私は漁師の妻として暮らしました。五人の子宝に恵まれました。十三年前に夫と死別し、十年前に私も脳梗塞で倒れました。被爆から二十〜三十年経った頃から、次から次へと体調が悪くなってきました。在宅介護を利用していましたが、一人暮らしも困難になりこのホームに来ました。海が懐かしいです。

もうたくさんです。真っ暗な防空壕の中に逃げ隠れる生活や、救急車のサイレンが鳴る度にビクつく生活が。孫や曾孫たちに、こんな思いはさせたくない。

原爆は地獄です

清水好子（八十七歳）



被爆地……己斐町（爆心地より二・五km）

当時の急性症状……喉の痛み・紫斑・水疱

家族の死亡……父親・母親・子供一人

現在の病状……高血圧・狭心症・白内障・骨粗鬆症

被爆時の状況及びその後の生活

お天気のよい暑い朝でした。外の掃除を終え、家の中の風呂場で洗濯していると、「ドカーン」と焼夷弾しょういだんが幾つも落ちた様な大きい音がしました。子供のいる四畳半へ飛んで行くと、二枚の戸ガラスが、クチャクチャに割れ、破片が部屋いっぱい飛び散り、手がつけられない有様でした。すぐに子供を座敷に連れて行き裸にして全身を見ました。二歳の男の子は無傷、私も素足でガラスの上を歩いたのに無事でした。何か変な空気を感じた私の喉はヒリヒリ痛みがありました。早く逃げねばと思い、子供をおんぶして外に出ました。隣の奥さんに会ったら、モンペの破れから左太腿部ひだりたいぶに六cm位のガラス片が刺さり血が出てるので抜き、オキシフルヨウチンで消毒し、包帯

をしてあげました。

その後、住吉町から父母が来ました。父は胸に火傷、母は頭が焼けて額に大火傷をしており、すぐに井戸水で顔や手足を洗い、布団を敷き、寝かせました。夜には母は失明していました。外の方は人通りでざわつき、服がボロボロで肉がバラバラに垂れた人が家の前ではボタンと倒れ、四人が死にました。夜、雨が降り、雨漏りのため、部屋で傘をさしました。七日朝、軍隊から主人が様子を見に来て、手配してくれたトラックで廿日市の小学校へ避難しました。大勢の中、おにぎり一日一個で、けが人にはハエがたかり蛆がわき、取り切れませんでした。水も少なく、母は夜死にしました。辛かったです。九日、主人と共に己斐に帰りました。己斐の土手から見る市内は、日本銀行や日赤は見えましたが、残りはくすぶり燃えています。十三日、父は死にました。子供と私に紫斑や水泡くずれが出て、病院通いをしました。主人が栄養だといって野菜、魚を仕入れてくれていましたが、子供は弱り、入院先の病院で十月に死にました。

原爆は地獄、本当に嫌です。

その後、男の子二人、女の子一人に恵まれました。主人は八十七歳で亡くなりました。

あれから六十年、今も忘れられない

菅 キクエ（七十八歳）



被爆地……旭町（爆心地より三km）

当時の急性症状……菌茎からの出血・呼吸困難

家族の死亡……なし

現在の病状……骨粗鬆症・白内障・変形性腰痛症

被爆時の状況及びその後の生活

私は国民学校五年生の時、松山から家族五人で広島に来ました。一人の兄は戦死、もう一人の兄は兵隊で支那方面に行っており、家には父、母、弟、妹、私の五人で暮らしていました。私は昭和十六年より陸軍被服廠に勤めておりました。戦争が激しくなり、周りは田舎に疎開（そかい）しましたが、母は死ぬ時は一緒と言ひ、広島に残りました。

八月六日、いつものとおり勤めに行きましたが、十五分遅刻して八時十五分に職場へ着きました。その時「ドーン」と大きな音がしたので守衛所の前に伏せました。守衛所の人（まもろうしやう）が防空壕（ぼうくわう）に入れと言うので、防空壕に飛び込みました。少しして外に出てみると空気が硫黄（りゅうわう）がかった様で、近

くが見えにくくなっていました。兵隊さんが鉄砲を持って立ったまま体が半分焼けているのを見ました。もし、私も道路を歩いて光に当たっていたら、今の私はおりません。外におられた人は皆、着ていた物はワカメがぶら下がった様になっていました。カラスが来て体のあちこちをつつき、私はどうなるかと驚くばかりでした。私は鳩の世話をしていたので、餌の大豆を取りに倉庫に行きました。体の焼けたところに白いメリケン粉の様なものを塗って横になっている人を見ました。みんなうめき声を出し、「お水、お水」と言って飲まれた方は死んでいかれました。兵隊さんが遺体を担架で外に出し、タル木の様な物で次々と焼き、私は目をそむけるばかりでした。

家は壁が落ち、隙間が出来て、廊下のガラスもみな壊れていました。八月六日の夜は防空壕



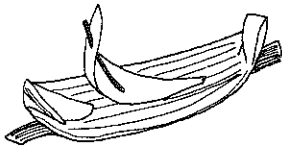
ホームの「文化作品展」

で寝ました。御幸橋みゆきばしの方が一晩中ぼうぼう燃えるのを見ながら夜を明かしました。辛かったです。次の日、勤勞奉仕きんろうほうしに行つて帰らない人を捜すために日赤病院前を通り、たかの橋まで行きました。が、その先は行かれませんでした。周りには大人も子供も真っ黒に焦げて、まだくすぶっていて、とても見られませんでした。八月九日、長崎にも原爆が落ちて、八月十五日に天皇陛下のお言葉で戦争が終わつたのを知りました。

私は二十一歳で結婚しました。主人は大工でした。瀬野川に住んで、私も働きました。主人の仕事がなくてお金に困ると母親が助けてくれました。母親は百一歳でなくなりました。

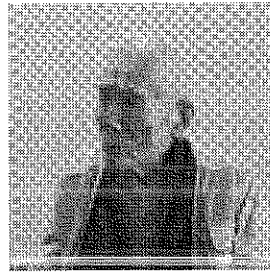
現在は、マスクをしなければ息が苦しく、背中も痛くて、日中はいすに座っています。のぞみ園に入園して、二年五ヶ月になり、幸せな日々を送ることができ良かったと思っています。

二度と戦争はしてほしくない、原爆は使わないでほしいと強く思います。



二度と戦争はしてはいけない

竹之内 武（九十四歳）



被爆地……南蟹屋町（爆心地より三km）

当時の急性症状……食欲不振・全身倦怠感・下痢

家族の死亡……なし

現在の病状……白内障・高血圧性心疾患

被爆時の状況及びその後の生活

当時、私は南蟹屋町の自宅に、妻と長男の三人で住んでいました。私は国鉄広島機関区に勤務していて、妻は借家十軒を管理しており生活は安定していました。

八月六日の朝は、勤務場所の屋上で点呼を済ませ、縄梯子で地上に降りた時に可部方面から、B24かB29と思われる大きな飛行機が低空で飛んで来るのが見えました。直後、大きな音と共に、目の前が一瞬にして見えなくなり、体が浮き上がった感じがしました。地上攻撃を恐れ、急いで水槽の下にある防空壕に皆と逃げ込みました。しばらくして防空壕から出てみると、時計は止まり、誰も全身真っ黒になっていました。（防空壕の天井裏に付いていた石炭の煤が爆風で舞い上がった

ため）周りを見ると、丸裸の状態で、やけどで皮膚がぼろきれの様にぶら下がった人が大勢、木切れを杖にして、府中町方面へようよう歩く状態で逃げて行く姿を見ました。爆風で洗濯場が吹き飛んでいて、作業用のナッパ服がそこらじゅうに散らばっていたので、裸同然の何人かの女性に、ナッパ服のズボンをあげました。私はコンクリートの壁の陰だったため、やけども外傷もありませんでしたが、自宅や家族のことが心配で家に帰りました。芸備線が矢賀駅から運転されていると聞き、妻と子供を連れて、私の実家（上深川）へ行きました。母が私たちを心配して帰るのを待っていてくれ、妻を抱き泣いて喜んでくれました。私は勤務命令がくるまで、実家で待機していました。一週間後位に勤務命令の通知（生き残った職員）が来た為、職場に復帰しました。復帰後も、全身倦怠感や特に下痢症状は長く続きました。

国鉄は定年まで勤め、その後、会社に勤めボイラーの仕事を八年間続けました。三年前（平成十三年）にのぞみ園に入園（妻ものぞみ園に入園している）し、職員さんに大変よくしていただき、何の心配もない生活ができ、とてもありがたく感謝しています。

二度と戦争はしてはいけません。核戦争がおきたら地球は死滅する。戦争が無くなることを願っています。

何もかも夢のようで

竹本 ハルコ（八十九歳）



被爆地……南三篠町（爆心地より一・七km）

当時の急性症状……下痢・左乳房の傷・左足膝下の傷

家族の死亡……なし

現在の病状……心筋梗塞・白内障

被爆時の状況及びその後の生活

私は、三宅製針会社に勤めている夫と、四歳と一歳の女の子の四人で暮らしておりました。前日、町内から「古木が必要な方は取りに行ってください」と回覧が回っていましたので、八月六日の早朝、私は隣の奥さんと一緒に大八車を引っぱって、風呂の薪まきに使う古木を取りに小網町こあみちやうまで行き、八時過ぎに家に帰ってきました。夫は会社に出かけ、子供は留守番をしていました。私がモンペを脱いでワンピースに着替え、座敷の掃除にとりかかった時、青色とも白色ともとれない光りと轟音ごうおんと共にパツと周囲が明るくなりました。私は爆風で家から四十メートル離れた畑に飛ばされ、叩たたきつけられて気がつきました。左胸と左足膝ひざ下から血が流れていました。私の傍らに

は、市場帰りのおじいさんが荷車ごと飛ばされていましたが、起こす事も出来ず、子供の事が気になり、裸足のまま家に帰りました。子供は家の下敷きになり大声で泣いていましたが、無事でした。私はすぐに布団を抱え、子供と一緒に南瓜畑かぼちゃばたけに避難ひたなしました。そこには近所の方が数人集まっていました。その時、急に黒い雲が出て薄暗くなり、雷いなづかと稲光いなづかりがして大粒の雨が叩きつけ、夏だと言うのに段々寒くなり布団を被かつてもガタガタ震ふるえがきました。雨が上がった頃、時限爆弾が仕掛けられたのではないかと話す人もいました。私はなにもかも夢の様で見当もつかず混乱していました。何処どこの家も壊こわれ、一緒に古木を取りに行った隣となの奥さんは、家の下敷きで亡くなられました。夫は、「子供は元気か」と言って帰って



旧護国神社の石灯ろう

爆心地から少し離れた護国神社境内の石灯ろうの石積みは、爆風ですれたり、持ち上がった。した。

(林 重男氏撮影)

来ました。切り傷はありましたが、家族の無事を確認すると安心して会社に戻りました。その時、家の前を沢山の人が己斐方面へ避難していました。私の家族は壊れかけた家で四〇五日暮らした後、古市の実家へ帰り、半年暮らしました。

その後、いろいろな事があり、夫と離婚して、中広町に間借りをして子供と生活を始めました。縫針包装の内職と仕出しの手伝いをしながら娘を育てました。子供を嫁がせ、私は仕事を辞め、独り暮らしとなったので、毎朝、中広三丁目バス停付近の掃除を奉仕で何十年も続けました。自分では、人に迷惑をかけないで生活できると思っていました。

娘に火のことだけが心配だと言われ、四十年余り暮らしたこの町を離れる決心をしました。むつみ園に入園し、現在はのぞみ園でお世話になっています。

私は毎朝、園内を歩行器で回り散歩しています。あいさつをして回り、声をかけるのが楽しみの一つです。平和学習会等に参加して、被爆体験を語ったり、世間話や歌を歌ったりすることが私の生きがいです。毎日、感謝しながら過ごしています。世界中が平和でありますよう願っています。

原爆が残した後遺症は今も……

玉里 シゲ子（八十歳）



被爆地……千田町（爆心地より一・七km）

当時の急性症状……なし

家族の死亡……なし

現在の病状……心不全・虚血性心疾患・高血圧

被爆時の状況及びその後の生活

私は、千田町に住んでいましたが、立ち退きのため一歳七ヶ月の娘と二人、南千田町に移りました。それは、原爆が投下される前日の八月五日のことでした。夫は、霞町に徴兵として出ており留守でした。当日、娘と二人で朝食を摂っていました。その時、窓ガラスに爆弾が落ちていくのが見え、とっさに娘を連れて、家の奥の部屋に逃げ、娘を下にして身をふせました。幸い家は崩れることなく、二人とも傷ひとつなく無事でした。すぐに外に出て避難しましたが、御幸橋には腕の皮がはがれた状態で歩く人や、川の中には、何人もの死体が流れており、とても恐ろしい思いをしました。その日は、修道中学のグラウンドで一晩過ごしました。次の日広島島の町は、千

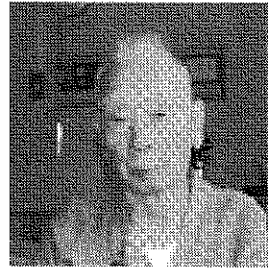
田町から広島駅が見えるぐらい焼け野原になっていました。八日、私は己斐から市電に乗り廿日市まで行き、バスに乗り実家である湯来町に帰りました。その時、バスの運転手に「あんたはどことも怪我をしてないから、乗せることはできません」と言われましたが、「私も被爆に遭いました」と言い、なんとか乗せてもらいました。

終戦をむかえると、夫も戻り、二カ月後には家族三人で広島での生活を始めました。その後息子が産まれましたが、わたしの毒が息子にいつてしまい、病弱な子でした。原爆は、その場限りでなく後遺症を残してしまうものなので、二度と使ってはならないと思います。直爆を受け怪我ひとつなく、比較的元気に過ごしてきましたが、もし、そのまま千田町に残っていたら、大怪我をしていたかもしれないし、もしかしたら、焼け死んでいたかもしれません。これもなにかの運だったのかもしれない。現在は、原爆養護ホームに入園しとても穏やかな生活をさせてもらっています。



きのご雲と大惨禍

中野 吉太郎（九十三歳）



被爆地……元宇品町（爆心地より四・一km）

当時の急性症状……倦怠感

家族の死亡……妻

現在の病状……脳梗塞後遺症・慢性腎不全

被爆時の状況及びその後の生活

当時、私は元宇品にあった宇品造船所で、呉の海軍省の船を造る工員をしていました。家は宇品二丁目にあり、妻と一男二女の五人で暮らしておりました。

八月六日の朝、私は宇品造船所で仕事をはじめようとしていたところ、空襲警報が鳴り、慌てて防空壕に入りました。静かになったと同時に家族の事が心配で外に出たところ、黒い煙が高く上がり、その中を火の玉が吸い込まれていくのが見えました。それが原爆の「きのご雲」だったと後で知りました。急いで家に向かいましたが、瓦などが散乱して御幸通りもどこも、まともには歩ける状態ではありませんでした。宇品の方へ逃げる人たちの姿は、この世のものとは思えぬ

姿で、焼けた皮膚がたれ下がり、ぞろぞろと進んでいました。私も無我夢中で家にたどり着きました。家はわや（めっちゃくちゃ）でした。屋根瓦は吹き飛び、窓ガラスは小さく砕けて畳の上に敷き詰めたような状態でした。

この日、次女と長男は能美島の祖母の家に行っていましたので無事でしたが、千田町方面に勤労奉仕に長女を連れて行った家内は、爆発の瞬間、思わず長女を抱え込んで伏せたそうです。長女は無事でしたが、家内は背中がズルズルに剥げる大ヤケドを負いました。幸い家内が勤めていた宇品四丁目の田村医院で手当てが出来ましたが、その後も体調はあまり良くなりませんでした。今なら助かったかとも思えてしまいます。あれがもとでとうとう命を取られたんでしょう。若くして亡くなりました。

その後は頼る者もいませんでしたので、子供三人を必死で育てました。子供たちも独立し、私は八十九歳まで元気で頑張ってきましたが病に倒れ、一人で日常生活を送る事がだんだんと難しくなりましたため、原爆養護ホームに入所いたしました。

今は元気で、人の迷惑にならない様一日一日を過ごしていけたらと思っています。

原爆に遭ったから思うのかもしれませんが、あの様な事は二度といけません。原爆を持つこともいけん。持っている者は使ってみたいと思うでしょう。

二度とこの様な悲劇が起こらぬ様、祈るばかりです。

被爆体験を伝えることが、私の務め

野村 啓理（七十二歳）



被爆地……比治山本町（爆心地より一・八km）

当時の急性症状……なし

家族の死亡……妹

現在の病状……白内障・高血圧・脳出血後遺症

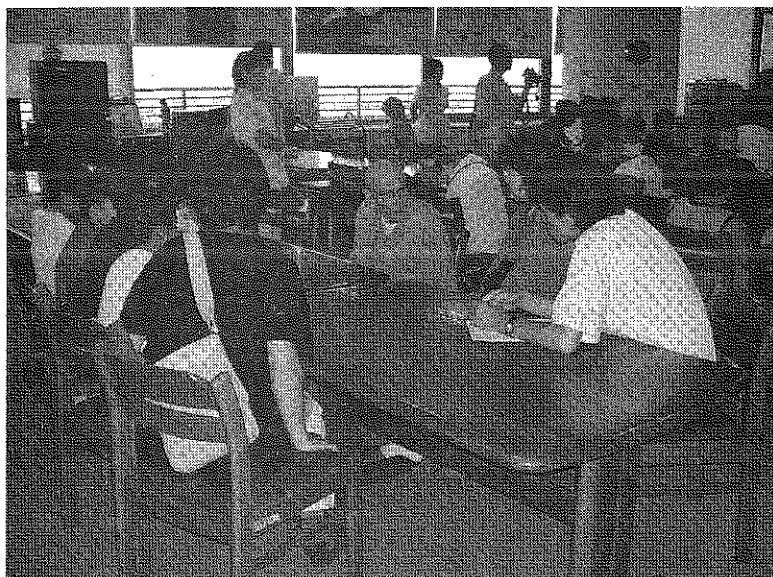
被爆時の状況及びその後の生活

八月六日、父は吉島豊学校よしじま豊の事務員をしていて五日の夜が宿直勤務で留守でした。兄は徴用中で呉くれにいました。母と妹は自宅（西白島）にいて朝食が済んでくつろいでいる時、原爆が落ち、家屋の下敷きになり、妹は死にました。

私はその時、中学一年生で、比治山本町付近で建物疎開そかいの手伝いをしていました。とても暑く、飛行機（B29）が飛んできたのでこれはおかしいぞと思い、友達とレンガ造りの軍隊の倉庫の中に隠れていたその時、「ピッカー」と光り、直撃弾が落ちてきた様なものすごい衝撃しよげきを受けました。外に出てみれば、一緒に作業していた人達が焼け焦げて、たくさん死んでいました。

「東に逃げろ、東に逃げろ」と拡声器かくせいきから聞こえてきたので、友達と府中、矢賀、中山、温品と駆けつけて逃げ回りました。それから友達の家が宮島なので、歩いて宮島に行き、夜八時頃に着きました。八月七日に広島に帰りましたが、家が倒壊たふさしていたので、家族で野宿をしました。八日に町内で決められていた避難場所ひなんばしょの原村（現在の安佐南区）の農家に行き、お世話になっていましたが、配給の時代に一度に大勢で行ったのでどうにもならず、十五日には竹原の伯母おばの家を頼って行き、畑仕事や塩田の手伝いをしながら、二年間くらい過ごしていました。

その後、広陵中学に復学、それから新生広島国泰寺高校に行きました。昭和二十七年に基町の市営住宅に移り住み、広島大学の教育学部を出て、広島市内の小学校の教員となり、仕事を休むこともなく元気で三十五年間良く働きました。



平和学習で「被爆体験」の聴き取り

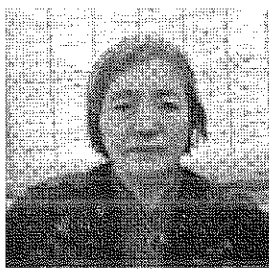
働き過ぎたのでしょうか、六十歳で定年退職（三月）して過ごしていたのですが、五月に脳内出血で倒れました。広島市民病院で手術を受けたのですが、左半身麻痺まひの後遺症こういしやうが残り、歩行が出来なくなりました。倒れた時、子供が三人いて、下の子供はまだ小学四年生でした。家族で今後の生活の事を話し合い、平成七年十二月に倉掛のぞみ園に入園させていただきました。妻や子供もよく来てくれるので、とても嬉しいです。

私は皆さんとお話する事が好きで、のぞみ園では平和学習に訪れた生徒たちに被爆当時の話をしています。これは自分の務めだと思っています。いつも平和を祈っています。



あの戦争が憎い

藤 本 ハナコ（八十一歳）



被 爆 地……………松原町（爆心地より一・七㎞）

当時の急性症状……………全身倦怠

家族の死亡……………父親・母親

現在の病状……………甲状腺機能低下症・高血圧・多発性脳梗塞・骨

粗鬆症

被爆時の状況及びその後の生活

当時、私は父母・兄弟と五人で南段原町に住んでいました。兄が東洋工業で働いて五人の生計を支えてくれていました。八月六日、体調のすぐれない私は、八丁堀にあるお灸^{きょう}専門の病院へ行こうと、駅前の電停で電車を待っていました。汽車が着いたのか、広島駅の方から大勢の通勤者が電停に押しかけてきたため、私はどんどん後ろの方に並ぶことになりました。その時、飛行機（B29）が上空を飛び、みんなで空を見上げていた瞬間、ものすごい光を浴び体が飛ばされました。私は、後ろに並んでいたおかげで、家の影になりケガはたいしたことはありませんでしたが、や

けどをした人がたくさん倒れていました。気が動転して、気が付いたら駅の地下にいました。意識がすっかりしてきたので、駅のホームまであがって驚きました。広島駅から八丁堀がしっかり見えたのです。建物が全て壊れ燃えていました。段原までの道は、狭いうえ建物が倒れていて、なかなか家に帰れません。私は、頭と肩から血が流れており、道端にたくさんの方が倒れているのを見ましたが助けてあげられる状態ではなく、家に帰るのが精一杯でした。途中比治山を越えておどろく人たちに遭いましたが皆、裸で皮膚が垂れ下がっていました。みんな、段原にあった「あかつき部隊」でケガの治療をもらおうと集まってきた人たちでした。家に帰ると母が火傷を負っていました。その母を引き連れて、そ



袋町国民学校救護所

外来診療状況（10月）

カヤの中に入院患者が収容されている。（菊池俊吉氏撮影）

の日の内に高田郡の父方の実家へ疎開そかいしました。八月十五日戦争が終わり、段原に戻りましたが、母の傷はよくならず九月五日に亡くなりました。その後の九月二十日には母の後を追うように父も亡くなりました。後に兄弟三人が残され毎日泣いて暮らしました。いい暮らしをしていなかったたのでとても寂しくつらい日々でした。そんな状況の中、兄が働いて妹弟を養ってくれました。二十三歳の時、結婚しましたが、結婚後も体調はすぐれず、貧血気味で起きられない事もありました。誰もが戦争をしてはいけないことは分かっているのに戦争になる。こんな辛い事はありませ
ん。

悲惨ひまんなことは絶対してはいけない命を落とすだけ……哀あわれな話は思い出したくもないしもう話たくもない……今は、のぞみ園にいたのでとても幸せです。命が助かっただけでも幸せだと思
います。欲を言うとお親が生きていてくれていたらと思えます。そして、もし兄がいなかったら自分たちはどうなっていたらどうかと今でも考えます。

可愛い娘を奪った戦争が憎い

古川 ミツヨ（九十四歳）



被爆地……二葉の里（爆心地より一・七km）

当時の急性症状……脱毛・やけど・貧血

家族の死亡……長女

現在の病状……高血圧・多発性脳梗塞・骨粗鬆症

被爆時の状況及びその後の生活

当時、私は万年筆会社に勤める主人と六人の子供に囲まれて、二葉の里に住んでいました。家の二階には、主人の会社の弟子が四く五人下宿していましたので、いつもにぎやかでした。

八月六日の朝、自宅近くで被爆しました。「ピカッ」と光り、気がつくと、単服をきていたため、上半身に火傷を負っていました。

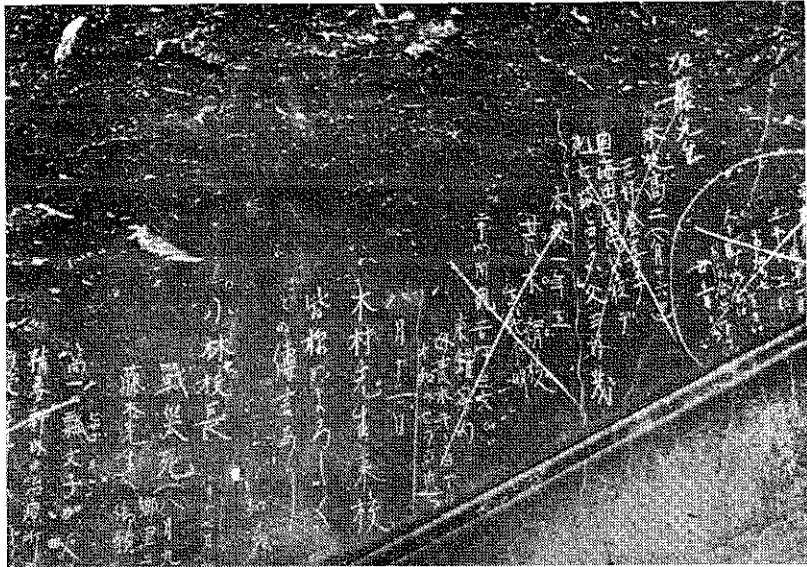
主人は段原の会社から急いで帰ってきましたが、学徒動員に出た長女が帰ってきませんでした。二葉の里も丸焼けになり、その晩は牛田の知人の家に泊めてもらいました。

あくる日、乳呑み児をかかえていましたので、長女の事を心配しながらも、貨物列車に乗り西

条へ、そこから呉線のバスに乗り継ぎ、黒瀬にある主人の実家に子供たちと身を寄せました。

心配していた長女は、学校の先生の知らせで東洋工業の寮に避難している事が判りました。長女、美枝子は女子商中学一年生、十二歳でした。まだまだ幼い顔をしていました。長女はあの日、袋町（現在の百メートル道路）に残っていた古い家の取り壊し作業の後片付けを手伝っていた時に被爆しました。

東の方へみんなどと一緒に逃げ、途中で下駄の鼻緒が切れたため、裸足で逃げたそうです。その姿が可哀想だったのでしょいか、通りがかった人が馬車に乗せてくれ、東洋工業の所で降ろして下さり、そこでは寮の世話人さんから、おにぎりなどを差し入れてもらったと後から聞きました。



壁に書かれた伝言 袋町国民学校の階段の壁面に残る伝言、白墨で書かれている。
(菊池俊吉氏撮影)

主人がやっと迎えにいけたのは数日たってからでした。西条まで連れて帰り、そこで大八車を借り、娘を乗せて黒瀬に辿り着きました。娘は火傷を負い、あまり良い状態ではありませんでした。部屋に蚊帳をつつて寝かせましたが、「苦しい、苦しい」と蚊帳の中で転げ回りました。「水を頂戴」と繰り返すので、長男が井戸水を何度も貰いに行ってくれました。

同じ状態が何日か続いたある日、

「お母ちゃん、さようなら」

「お父ちゃん、さようなら」

「みなさん、さようなら」

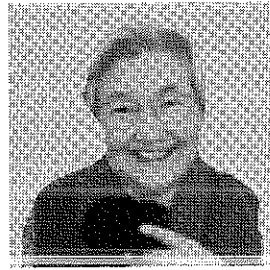
と何度も言うのです。生きる事を諦めたのでしょうか。それから間もなく亡くなりました。

戦争はするもんじゃありません。大きな国を相手に勝てるはずがありません。日本が早く降参こうさんしてくれていたら、若い者がたくさん死なずにすんだのだに思っています。



「8・6」の大惨状、今も心に深く……

松岡 フサ子（八十七歳）



被爆地……南観音町（爆心地より二km）

当時の急性症状……全身倦怠感

家族の死亡……なし

現在の病状……白内障・高血圧性心疾患・糖尿病

被爆時の状況及びその後の生活

私は、主人と息子、主人の母、主人の妹の五人で南観音町に住んでいました。主人は三菱造船所に勤めておりました。

八月六日、台所で朝食の後片付けをしておりましたら「ドーン」という大きな音がし、戸棚が倒れ下敷きになりました。やっとのことで這い出し、あたりを見れば何もかも倒れ、暗くて何が起きたのかサッパリ分かりませんでした。こどもが外で遊んでいる事を思い出し、早々と連れ帰り家を見ると、家は傾き倒れそうになっておりました。中にいる母のことが気になり「お母さん、お母さん」と大声をかけましたが返事がなく、あたりを見まわすと母は柱に寄りかかっ

ちらこちらから血がでていました。動くと言おうのでよく見ると、ガラスの飛び散った破片が体に刺さっていました。その母を妹が背負い、私は子供を連れて母の知り合いの農家へ行きました。農家のご夫婦に「母をよろしく」とお願いをして、私は主人が心配ですので子供二人と南観音町に帰りました。主人は無傷で帰っており、一応安心しましたが、夜になると高熱が出て苦しみ、便が真っ赤になるほど出血して下る様になりました。当時はお医者さんに診てもらおう事も出来ず、主人の同僚にお頼みして、三菱造船所よりトラックを借りて、吉田町に連れて行ってもらいました。広島に帰ってきてでも働く事もできず、七十一歳で死亡するまで、色々な病気で苦しみ、入退院のくり返しでした。大手町の河村病院の院長先生には本当に良くしていただき、ご恩を忘れる事はできません。手を合わせております。私は広島県商業学校で事務職をして働きました。現在、高血圧、糖尿病、脈の結滞などの病気を持っています。

二度と戦争をしてはならない。核兵器を使用した戦争はいけません。平和を願うばかりです。

やけどの痕が今も思い出させるあの大惨事

松谷 巴（八十六歳）



被爆地……鶴見町（爆心地より一・五km）

当時の急性症状……やけど・高熱・脱毛

家族の死亡……なし

現在の病状……自律神経失調症・頭痛・白内障

被爆時の状況及びその後の生活

私は二十三歳で結婚し、女の子を出産しましたが、夫は間もなく戦死し、嫁ぎ先の親が「若い身で先があるから」と言い娘を引き取り、私を実家に帰しました。

実家の母親は昭和二十年七月に肝臓ガンで亡くなり、私は母親代りで、家事や弟たちの世話をしていました。実家は安芸郡坂町にありましたが、八月六日の朝、私は建物疎開の作業に出るため広島に出て、鶴見橋の川岸の柳の下にあるベンチに腰掛けて仲間を待っていました。突然、背中、右肩に閃光を浴び、「ドーン」と大きな音がし、気を失ってしまいました。気がついた時には、周りには誰も居らず、比治山の方へと皆が歩いていたので、自分も行きましたが、人が大勢いる

ので、私は鶴見橋へと引き返しました。「やけどの人はこちらに来て下さい」と言われたのでついていくと似島に連れて行かれました。講堂のような所には「痛い、熱い」とうめく人達が大勢おり、地獄の様でした。そこで赤チンを付けてもらいました。竹の中に入ったおかゆの食事が出て、それを食べるとすこしは落ち着きました。

夜が明けると担架たんかに載せられた人たちが次々と運ばれ、亡くなられた人は積み上げられ焼かれています。その時の衣服の焦げる臭いや人を焼く臭いは、今も忘れません。

翌日、役場の人が捜しに来てくれて、戸板車に載せられて家に帰ることができました。親類の人たちが面倒まわを看てくれました。高熱が続いて医者にはもうだめだろうと言われ、その時は意識がもうろうとして、髪の毛も抜け落ちました。ヘチマ水がやけどに効くと持って来てくれた人がいて、それをつけるとだんだん良くなってきて熱も下がりました。あの時のやけどの痕は今も残っております。

八月十五日の終戦はラジオで聞きました。

母の四十九日、百箇日を済ませた後、再婚しました。夫は傷痕軍人で四歳年上でした。その夫は十年前、胃がんで亡くなりました。

子供は三人おりますが、それぞれ大学を出て自立しております。私は軍人恩給と家賃収入があり生活できました。坂町の家に一人で住み、日本舞踊や生花をして楽しんでおりましたが、自律神経失調症、頭痛などで一人暮らしが不安になってホームに入りました。

今は幸せです。夫は毎晩夢に現れます。外に出る機会が少ないので、本を読むのが楽しみです。

大地震のように壕が揺れて

森 田 年 男（九十三歳）



被 爆 地……………西観音町（爆心地より一・三km）

当時の急性症状……………呼吸困難

家族の死亡……………なし

現在の病状……………糖尿病・めまい

被爆時の状況及びその後の生活

私は当時、義勇陸軍大尉で、中国軍管区司令部経理部工務科陸軍技師の任務について居ました。あの日、小磯国明中将、二宮春重中将、長谷川師団長と共に第五師団司令部の防空壕の中に居りました。地震のように壕が揺れて、外に出てみると家が皆無くなっており、宇品の方まで見渡せ、原爆ドームと福屋デパートの二階までしか残っていませんでした。

その時はケガもなく無事でした。野戦病院が紙屋町にできて負傷兵が収容されておりそこへ行きました。私も呼吸困難になったりしたが治療がゆきわたらず、己斐の山奥に逃げていた妻と二人の子供を捜しに行くと、長女は顔に火傷、足も何かの下敷きになってケガをしており、己斐小

学校で治療を受けていました。

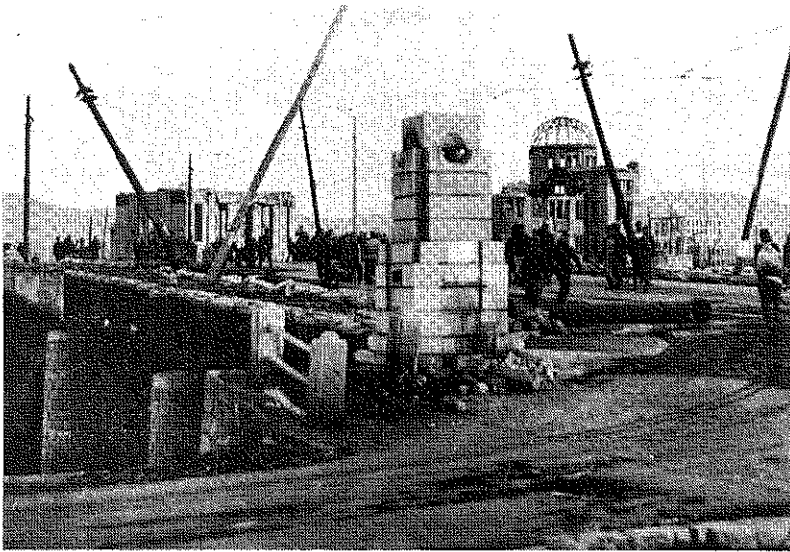
私の生れ故郷が萩なので、そちらに帰るようにと軍医に勧められました。二日後に広島駅で罹災証明書^{りさい}をもらい萩に帰りました。

萩で友人が外科医をしていたので、そこで治療を受けました。

半年くらい萩で暮していましたが、広島市から罹災者^{りさい}に対して一律にお金が貰えることになったので広島に戻ってきました。

その後比治山で工務店を始めました。商売は繁盛し、従業員五人と共に泊り込みで仕事をし、一ヶ月も家に帰れないこともあったりして、家族が心配し夜中に様子を見に来ることもありました。おかげで五日市に土地を購入でき、今は娘夫婦がそこで中古車販売をしております。

子供達はそれぞれ自立し、妻と離別してから



相生橋 原爆投下の目標となった相生橋。
目標よりわずかに南東にそれたものの破壊ははなはだしい。 (アメリカ軍撮影)

はずっと一人暮らしで基町の市営住宅に住んでいました。毎日ヘルパーが来てくれ身の回りの世話をしてくれましたが、時々頭がふらつき、脳の薬を服用しており、一人暮らしが不安になってホームに入りま
た。

ここは食べものもおいしく、皆が優しくしてくれます。ずっとお世話になりたいです。

「二人でしつかり生きていけ」と主人の教えが……

矢野 フミエ（九十四歳）



被爆地……牛田町（爆心地より二・五km）

当時の急性症状……脱毛・下痢

家族の死亡……夫

現在の病状……閉塞性動脈硬化症・白内障・腰痛

被爆時の状況及びその後の生活

当時、自宅は市内の下流川町にあり、主人と主人の母親と三人で暮らしていました。主人は本

通りで、お菓子子の製造会社を営んでおり、私も店を手伝っていました。戦争が激しくなるにつれ、勤勞奉仕きんろうほうしに明け暮れする毎日となりました。兵器廠、被服廠と厳しい勤務を命じられ、私はとうとう体調を崩し、寝込んでしまいました。働く事ができなくなった私は、主人の勧めもあって洋裁を習いに行っていました。

八月六日、牛田新町に強制疎開そかいしていた私は、二月に誕生し、お座りの出来始めた長男を座敷に座らせ、井戸水を汲んでいた時、飛行機が低空で二葉山の方向へ飛んでいくのを見えました。その音と同時に長男が「えーん！えーん！」と泣くのもなく、喋るしゃべでもない声をあげました。その声は私を呼んでいるように聞こえたので、急いで長男をおぶりにいき、井戸の所へ戻りました。空襲警報くうしゅうけいほうが鳴りはじめたので、急いで台所へかけ込みました。その直後、「ドカー



原爆死没者慰靈碑参拝

ン」と大きな音がしたと同時に、家が大きく浮かび上がって下に落ちました。ガラス戸はすべて壊れ、さっきまで長男が座っていた畳にも破片が突き刺さっていました。主人をすぐにでも捜しに行こうと思いましたが、「市内はひどい事になっていて人の入れる状態ではない」とひと伝えに聞きました。しかし、心配のあまり縮景園の所まで様子を見に出かけました。赤子を背負うていた私は、危険なためこれより先には行ってはいけないと足止めされ、主人を捜しに行くこともできず、いらいらしていました。その日は、似島方面に向かつて行ったり来たりする人が夜中まで続いています。

幼子を抱え体調のすぐれない私は、大阪の親戚のところへ行こうと決め、汽車に乗ろうとしましたが、構内は人々で混雑していました。見知らぬ人が子供を窓から乗せてくれ、私たちは大阪まで行き、お正月過ぎまでお世話になり、帰広（牛田新町）しました。

小さな子供を抱え途方に明け暮れた私は亡くなった主人のところへ行こうと何度も考えました。その時「自分は洋裁ができる。主人が勧めてくれた洋裁がある。」と思ひ、洋裁を教えるなどして生計をたて、子供を育てる事ができました。これも主人の「二人でしっかり生きていけ」という教えだったのではないかと思います。

今は長男も立派に成長し、もったいない生活をさせてもらい、とても幸せです。

戦争をしたらいけない。原爆は絶対に使ってはいけけない。いつまでも平和な暮らしが続くように祈るばかりです。

紙碑・被爆老人のあかし 第五集

平成十七年五月三十一日 印刷

平成十七年六月 四日 発行

編集者 財団
発行者 法人

広島原爆被爆者援護事業団

広島市安佐北区倉掛三丁目五〇番一号

印刷 可部プリント社

〒731-0221 広島市安佐北区可部二丁目三八一三二

電話(〇八二) 八二二一三六五





